

田牧一郎の 第57回 カリフォルニア稲作便り

日本の稲作は国際競争力を持てるのか？

(その5)

カリフォルニアの2001年産米は、春の作付け時期にはコメ価格の低迷、そして水田かんがい用水の売却もあって、水田の作付け面積が前年対比で約15%減少しました。

しかし、単位面積あたりの収穫量が平年作を上回ったため、コメ業界が期待したような供給量にはなりません。

2000年産米の持ち越し在庫もあり、価格が急に上昇するような環境にはないのですが、とにかく値上げをしたい意向が精米業者全体にあり、(実際どこまで値上げできるのかは別として)5~10%程度の値上げを希望しています。

アメリカ国内のコメ消費は毎年拡大し順調なのですが、問題は輸出です。特に日本向けのウェイトが大きくなり、この入札のために精米業者や穀物商社など輸出側の価格競争が激しくなり、カリフォルニア米全体の相場を下げる一つの要因になっていることも事実です。それに国際相場の低迷が続いたためにアメリカ産のコメが割高となり、輸出市場で価格競争が厳しいことも相変わらずの低価格の原因です。

世界的なコメの豊作と穀物全般の低価格構造から抜け切れず、大きな渦の中にいると言えると思います。

これは結果として開発途上国がコメを購入しやすい環境を作っているとも言えます。その反面、コメを輸出して外貨を稼いでいる所にとっては大きな打撃でもあります。

コメの生産と流通をめぐる各国の利害は単純には判断しきれない部分でもあります。

このような国際相場と海外市場での価格競争、そして輸入されるコメとの国内マーケットでの競争のために前回紹介した価格調整機能が役に立ちます。

●国際競争のための仕組み

コメの国際競争のための仕組みとして、次のような対策を組み込んでいます。

コメの国際相場が下がった時の返済免除額の設定です。

日本の国内産と競合する品質のコメが、海外にはあまりないのも事実ですが、加工用途や一部一般消費者向けに販売されているものもあります。

この海外から入ってくるコメの価格と競争するために、国内価格を調整できる機能がなければ競争にならないのが現実です。

海外から安く入ってくるコメには一定の関税で対応するのが一般的ですが、日本のコメの場合関税のみでは不十分とも考えられます。そこ



たまき・いちろう／1952年12月郡山市生まれ。中学卒業と同時に就農。89年渡米。カリフォルニア州で稲作(約80ha)を開始。タマキ・ファームス・ジャパン TEL045-781-6426 FAX 045-781-6427

で国際相場が下がった時、国内価格も下げられるようなシステムがあれば、価格競争がしやすくなります。

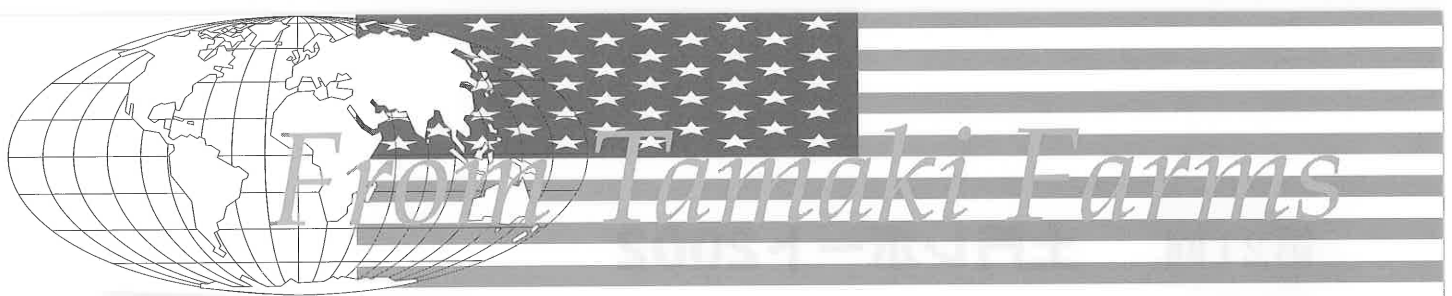
そこで政府機関が最低価格として、仮に玄米60キロあたり8000円を生産者に貸し付けますが、その返済額をコメ国際相場の下げ幅に連動して金利とともに一部免除することにし

ます。仮に国際相場が60キロあたり10000円の下げがあったとしますと、生産者は8000円を受け取っていますが、返済する時に7000円だけを返済すれば良いことになります。

つまり、この10000円が政府機関からの補填額となり、金利と合わせた額だけ安く販売しても、実質手取りは変わらないことになり、従って10000円安く販売できることになり、輸入米との競争ができることになります。

コメ卸や消費者までこの10000円がそっくり反映されるかは状況によって異なるでしょうが、生産から消費されるまでの間で誰かがこの差額の利益を受け、何らかの競争対策が取れることになりました。

この額をどのような計算式で算出するか技術的に困難でしょうが、非常に有効な手段であることは間違いありません。



これは実質的な政府機関によるコメ流通業者に対する支援となる制度です。コメの生産を安定させるためには生産者の利益確保も大切な対策ですが、同時にそのコメを加工販売する精米業者や販売業者の経営が成り立たなければなりません。

コメ業界全体が利益を生み出し再生産が可能な仕組みがないことには、産業のどの部分も成立しません。

● 参入規制の撤廃

基本的に参入の規制を無くして、誰でもコメ業界に参入できるような制度のもとでは、特定の業者や個人の経営安定に政府の対策が使われることにはなりません。

コメを生産する人も精米する人も販売する人も、仕事をしたい人がすれば良いのであり、結果として経営が成り立つことで継続できれば良いと思います。

この基本をしつかり押さえておかないと、コメ業界の発展に有効な手段があっても実行できなくなってしまう。

結果として経営の継続が可能などが産業を担い、発展させていくのが筋だと思っています。

専業稲作経営でも、兼業稲作でもそれぞれの経営の考え方があり、それぞれの置かれた環境の中で選択した稲作経営の仕方です。平地でも中山間地でもコメを作り販売する経営として捉えれば同じです。株式会社でも個人でもコメを作るための地域のルール（水の配分など地域独特の決まり）を守り、経営を行えば良いと思います。色々な経営が存在することで様々な工夫が出来たり、独自色を出すことも可能になると思います。

消費が多様化しつつあるコメ市場に対応する生産として、多様な経営スタイルがあっても良

いと思います。

長い間、問題とされてきた農業後継者対策も、参入の規制撤廃によって誰でも入れる環境を整えることが、問題解決の第一歩だと思います。

小手先の規制緩和だけでは特に深刻化しているコメ作りの後継者は十分に確保出来ないことは、経験済みのはずです。

人的な要素で大きな不安を持っている将来の日本のコメ作りを、活力ある産業にするためには思い切った対策が必要です。「もうそろそろ」と言うより取り返しのない状況になる前に、英断が必要です。

● 国際競争力を持てる



水田除草剤散布のためのヘリコプターユニット

この様な購入の仕方になれば、私は自信を持って日本のコメ作りは国際競争力を持てると思っています。単なる思い入れや慰めではなく、潜在的な力は十分あると思っています。

現在のコメ作りにまつわる規制や制度が本来の力を抑えてしまっているとも言えます。

カリフォルニアから見て、日本のコメ作りの技術レベルが高いことを実感します。

一つは、育種も含め研究開発が優れていることや、その技術を現場に実現する普及体制が整っていることがあります。

何より生産者が新技術や新しい試みに積極的に取り組む柔軟な姿勢を持っていることです。

コメ作りに関する情報をよく学び稲の栽培技術では、他を大きくリードした世界一の水準にあると思います。

ここ何年かカリフォルニアの生産者も含めコメ産業の現場を担う人達と一緒に仕事をしていますが、コメ栽培の技術やコメについて持っている一般的な知識など、日本の生産者とは比較になりません。

直接、それぞれが担当している分野では必要なことは知っていますが、どちらかと言えばそれだけの知識で止まっています。カリフォルニア稲作の低コストを追求した分業システムがそのようなしているとも言えますが、コメ作りから製品を作るところまで全行程を一貫して見られる知識と技術がここにはまだありません。

日本ではごく普通にコメ作り生産者が考え実行している作業を、こちらではすぐに取り込むことができません。新しい技術の実施には大変保守的な稲作経営者が多く、従来の経験が最重要と考えられている部分もあります。

コメ作りも含めたコメ産業に携わる技術者として、人的な面での日本の競争力は世界一だと思っています。